

グリーンコープ30周年記念特別企画 30th Anniversary ありがとう これからも

グリーンコープ 30周年記念 特別企画 平和の 取り組み

「平和」とは、 生命を大切にすること 生活を大切にすること 共生・平和長崎自転車隊

「食へもの」が、その安全性よりも経済効率を優先してつくられていた1970年代。大切な家族を守るため、安心・安全な食へものを求めた人たちが立ち上がり、各地にグリーンコープの前身となる生活協同組合(生協)や共同購入会をつくりました。



自転車隊をとおして 平和の大切さを実感

自転車隊は、「走る人」、「応援する人」、「支える人」で構成されており、この仕組みを作り上げることができたからこそ、これまで継続することができています。



子どもたちへ 平和への願いを託す

無名舎—こどもの家 武田孝子さん



武田孝子さん(以下、孝子さん)は、高校教師を経て、夫である武田桂二郎さんと、地域の子どもたちの成長を心身ともに見守ってきました。

「こどもの家」で行われる野外活動では、2歳前後から、最初はリヤカーに乗って、少しずつ脚力をつけ歩けるようになると、公園まで往復3kmの道のりを歩きます。

1984年8月、お盆をひかえた猛暑の街中を、軍艦マーチを高らかに、競争賛美の街宣車が走っていました。「これはいけない、何かをしなれば」という強い思いがこぼれました。

日常の平和の大切さを知り 連帯を確かにした自転車隊の取り組み

自転車隊のはじまりは 小さな託児所の野外活動

「自転車隊」の原点は、「無名舎—こどもの家(以下、塾班)」の野外活動です。塾班では、幼い時から体と脳をバランスよく動かす、意志や感情をつかさどる脳幹部を活性化することが大切と考え、日常活動に自転車を取り入れていました。

共生・平和長崎自転車隊・銀輪隊とは

長崎に原爆が投下された日に合わせ、毎年8月8～9日、福岡の柳川から長崎の爆心地である松山公園(爆心地公園)までの125kmを、自転車隊は約50km、銀輪隊は全行程を、「不戦」のゼッケンを背に、自転車で走行します。



連帯を確かにした自転車隊の存在

グリーンコープが連帯してひとつになる過程に、自転車隊の存在が大きくあります。

1988年、九州と山口の25の地域生協が集まり、グリーンコープ連合が設立されました。「せつげん派生協」であることや、L.L.(ロングライク)牛乳反対など、安心・安全な食へものを追求し環境を守る姿勢は、致していても、それぞれの生協にそれぞれの歴史があり、考え方やプロセスも違い、文字どおりひとつになていくのは大変難しい道のりでした。

なぜ自転車か・・・

「生まれおちた子に、親は様々な願いを持つ。乳がたくさんのめるように健やかであるように、歩めるように...。自転車はその歩みの延長である。自転車ほど素朴でやさしい乗り物はない。

(無名舎—こどもの家 武田孝子さんの言葉を引用)

※1 武田桂二郎さんと無名舎—こどもの家

武田桂二郎さんは、グリーンコープ連合初代会長。1972年に福岡県柳川市に「無名舎—こどもの家」(創立時は柳下村塾託児所)を創設し、託児所を自宅に開設。託児所、小学生教室、中高生の学習塾として現存する。



先頭を走る武田桂二郎さん(右) (武田孝子さんが、先導車から撮った写真)

託児所親の会とともに「たべもの共同会やながわ」(「共生クラブ生協」グリーンコープ生協ふくおかの前生協の一つ)を立ち上げた。「グリーンコープ宣言」を起草し、グリーンコープ運動の中心となり、グリーンコープの連合結成や発展に大きく寄与した。「共生・平和長崎自転車隊」の原点となった、平和サイクリングの発起人。1994年逝去。



グリーンコープ30周年記念特別企画 30th Anniversary ありがとう これからも

マニュアルに込めた  
自転車隊への想い

グリーンコープふくおか準備会  
元組織担当組合員事務局  
吉岡 律子さん



1993年、吉岡さんは塾班と他県の生協をつなぐ役割を担う第二の主体であるグリーンコープふくおか準備会(以下、準備会)で、組織担当の組合員事務局として関わりました。当時、自転車隊の運営を誰もが分かるよう、細部にわたってマニュアル化することに尽力された様子と、自ら自転車隊の一員として参加して感じたことなどについて、語っていただきました。

当時、個別に存在していたグリーンコープの福岡県内の生協がひとつになるために、準備会が立ち上がり、さまざまな活動が提起されてきました。その中で、「無名舎」ことこの家(以下、この家)で取り組まれていた長崎への平和サイクリングに、準備会も一緒に取り組めないかと提案があり、検討が始まりました。柳川から長崎への取り組みとはどんなものか、「この家の家」を訪問しました。指導者の方々のお話や子どもたちの様子に触れ、こんな小さな子どもたちが炎天下、長崎まで自転車で行くのかと驚いたことを覚えています。と同時に、子どもたちの未来のために大人たちが真剣に向き合っていることに感動しました。

手探り状態の中、「この家の家」に指導いただき、組合員の関わり方、参加対象者、自転車隊の名称、自転車隊の動き、宿泊先の確保、応援のしかた、バスの選定など、検討することは多岐にわたりましたが、まずは最初の自転車隊に取り組みむことができました。出発前日の柳川宿舎での食事の内容や時間枠の設定など、たくさんの課題が浮きぼりになりました。また、全行程を走る銀輪隊、部分走行の自転車隊、応援する人など、参



加者全員の安全を考慮した取り組みをどう提供するか、マニュアル作りが求められました。参加対象もオールグリーンコープとなることで、第一、第二、第三の主体の確立と、それに対応したマニュアルが完成しました。なぜ、自転車なのか「なぜ、不戦なのか」それらを深めることが、この取り組みを成功させる原動力となりました。組合員事務局を退任して数年後、夫と二人、自転車隊に参加しました。炎天下、必死で自転車を漕ぎ、あの日見峠で「もうダメー」と諦めかけた時、「頑張れー」この応援の方々の声に励まされ上りることができました。「あー、これなんだー」「だから、ポイントごとの応援が必要なんだ」と身に染みて分かりました。苦勞して作ったマニュアルが、自転車隊を支えるすべての人によって活かされていることを実感しました。



自転車隊の取り組みを  
通じて築いてきた  
グリーンコープの平和

元グリーンコープふくおか連合組織委員長、  
のちにグリーンコープ連合組織委員長  
福島 戸貴子さん



福島さんは、自転車隊の取り組みについて話し合う三者協議会で、第二の主体であるグリーンコープふくおか連合組織委員長や、第三の主体であるグリーンコープ連合組織委員長として、組合員の平和への想いをつなぐ役割を担いました。当時を思い出して語っていただきました。

私がグリーンコープ連合組織委員長を務めていた2000年頃は、自転車隊の取り組みもグリーンコープの平和の取り組みとして定着し、単協からの参加も増えてきた時期でした。関わる人が増えると、想いをひとつにすることに大きなエネルギーを要しますが、そうした検討の経緯はとても大切です。組織委員会では時間をかけて丁寧に見直しを行いました。「安全は保障できるのか」「なぜ、長崎なのか」など、真剣になればなるほど二人の母親としての想いがあふれ出しました。

一つ、強く思い出されることがあります。グリーンコープふくおか連合組織委員長の時、「平和のつどい」のプログラムについて話し合いました。「集会では、みんなが知っている歌を使ってはどうか」という意見が出されました。知らない人同士手をつないで歌うことで、心をひとつにし、平和の尊さについて考えるきっかけになればと思いい、「WAになっておどろろ」の歌はどうかという検討をしました。このことを自転車隊の三者協議会で提案しましたが、塾班からは、「今まで歌ってきた歌(青い空は)を大切にしたい」と言われました。それがなぜなのか考えることをとおして、自転車隊の原点を確認することになったのです。塾班にとって平和への願いを訴えながら、自



転車を一生懸命漕いで辿り着いた長崎で歌う歌は、特別なものだったのだと思ひ至りました。組織委員会は塾班の思いに寄り添っていただけです。

私は、自転車隊のスタッフとしても関わってききました。出発の日の朝は3時に起きて準備を始め、炎天下を走る自転車隊と銀輪隊を支えます。走る人も応援する人も全員が寝食をとまじ、苦勞や喜びを分かち合うことで、自転車隊の取り組みの素晴らしさや意義を体感することができました。

平和が当たり前になっっている私たちに、平和について日常的に考える機会はありません。しかし、自転車隊に取り組みむことをおとして、「グリーンコープの平和」について考えられるようになりました。平和とは、お互いを認め合うことから始まると思っています。これからも自転車隊で感じたことを心にとどめ、日常を大切にしていきたいと思っています。

※2 第一、第二、第三の主体のそれぞれの責任者が集まり、自転車隊の具体的な内容について検討した。

被爆の地「長崎」から見た  
共生・平和長崎自転車隊

グリーンコープ生協(長崎)  
元理事長  
太田 千賀子さん



太田さんは、被爆二世。母親は爆心地近くで被爆しました。毎年8月9日の早朝、爆心地である松山公園(爆心地公園)を訪れます。組合員活動から離れた今も、一人の組合員として自転車隊の運営を支えるスタッフをねぎらい、自転車隊を出迎えています。自転車隊の取り組みの検討が始まった頃、長崎県南部生協の平和行進実行委員長として、その後グリーンコープ生協(長崎)の理事長としても自転車隊の受け入れに尽力された太田さんに、受け入れる立場から見た自転車隊への想いを語っていただきました。

松山公園で自転車隊を長崎県南部生協が受け入れることについて侃々諤々(かんかんげんげん)の議論がありました。坂道の多い長崎に住む私たちにあって「自転車」はとても遠い存在でした。福岡から長崎まで、ましてや急な坂が延々と続く日見峠や、車が行き交う狭い道を自転車隊で隊列を組んで走行するなど危険極まりないと、反対の声が大きく上がりました。また、被爆地長崎がゆえに受け入れがたい想いを抱く組合員もいて、なかなか心をひとつにできない状況もありました。そうした中、当時の私は、「とにかく長崎に来て何かを感じてほしい。きっと二人ひとりが生命を大切にすることにつながるはず」と思っていました。それは、塾班で自転車に



乗って野外活動に取り組み子どもたちの様子を武田桂二郎さんから聞くうちに、できるかもしれないという想いが少しずつ芽生え、確信へと変わっていったからです。そのことを丁寧に伝えると、長崎県南部生協の理事会メンバーも「一人ひとりの一歩を踏み出そう」と気持ちが出て、初めての自転車隊受け入れへと漕ぎ着けることができました。

参加者が全員1日目の行程を無事に終えたことを確認し、祈るような思いで8月9日を迎えました。みんなが無事に松山公園に入ってくる姿を目にした途端、胸がいっぱいになったことを思い出します。そうした想いは、今も変わることはありません。

私は被爆した母から生を受け育ちました。今こうしてこの長崎で生きていくことに、特別な想いがあります。平和を語る時、戦争と表裏の平和ではなく、人が人として生きられる「平和」を語っていききたいと思えます。



グリーンコープは  
「平和の取り組み」を  
大切にしています



グリーンコープ共同体の行岡良治顧問の著書に以下のような言葉があります。

「私たちは「食へもの」の問題を通して、『生命』の問題に関与しているわけですから、生命を本質的に脅かしている問題、つまり、暴力と戦争、ひいては、平和に関する問題について、何の考えも持たないまま、生協運動にかかわるわけにはいけません。歴史的事例を参照すれば、戦前の日本では、戦時体制の形成にともない、生協は解散させられました。戦争は、国内では戒厳令と総動員体制を意味しますから、生協はかならず解散させられます。平和は、生協の存在そのものにかかわり、直結するという認識が不可欠だと考えます。(行岡良治顧問著「食へもの運動論」より抜粋)

グリーンコープの平和の基本的な考えは、「平和とは難しいことではなく、戦争がない状態であり、「普通に生きているその人がそのまま日々を送っている」ということを何より大事にしよう」ということに凝縮されています。

また、グリーンコープの「食へもの運動」をはじめとするさまざまな取り組みには、人と人との結びつきをとおしてお互いに認め合い、生命を守るといった想いが貫かれています。



「不戦決議」はグリーンコープの平和論

「不戦決議」は1995年グリーンコープ連合第三期通常総会で、「グリーンコープの平和論」として採択されました。戦後50年という節目の年に、日本がかつて戦争を發動したという事実を踏まえて、初代グリーンコープ連合会長・故武田桂二郎さんが書き残したものがグリーンコープの平和論として確認され、まとめられました。



不戦決議 不戦はグリーンコープの原点です

- 一、戦争は最大の暴力である。兵器と軍隊は最大の暴力装置である。私たちはこれを否定する。
- 二、私たちは、平和と生命のものには価値がない、平和と生命を賭して何を守るかに価値がある、という考えに、平和と生命のものに価値がある、だから私たちは平和と生命を賭してでも平和と生命を守ろうとするだろう、しかし、むしろそれ以上に、私たちが平和と生命を賭してでも平和と生命を守らなければならない状況そのものを否定する、守る行為さえ肯定しない、という考えを対置する。
- 三、私たちは、平和は部分的に腐る、という現実には耐える。
- 四、私たちは、法が暴力から人間を守る、しかし次の次元では法そのものが人間に対する暴力に転化する、悪循環である、という現実は見すえる。
- 五、私たちは暴力の根源を人間の本性に還元しない。
- 六、私たちは、暴力の根源は、完全な情報公開、徹底的な話し合い、機敏で責任ある対応、この三つの構造的な欠落にあると考える。
- 七、私たちは今、平和と生命は生協運動にこそ不可欠であると思う。生協運動の自立性も地域性も戦争という最大の国家性と職業性に消される。